様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　４ 月 ２１ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２１５９

研究課題名（和文）画像の意味論に関する哲学的研究

研究課題名（英文）Philosophical Inquiry into the Semantics of Picturial Images

研究代表者
清塚　邦彦（Kiyozuka, Kunihiko）

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：４０２９２３９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、そもそも画像とは何かという問を巡って、現代英語圏における描写の理論を手掛かりに検討を行った。その準拠枠としたのは、イギリスの美学者R・ウォルハイムによる絵画経験の二重性（twofoldness）という考え方である。二重性とは、絵を見る経験が、物体の表面を見る経験であると同時に、当の物体とは異なる対象を（その像を）見る経験でもあるという事実を指す。英語圏における描写の理論はこの二重性の正確な意味をめぐる多様な説明案の間の対立から構成されているとも言えるが、本研究では、K・L・ウォルトンのメイクビリーブ説に準拠しつつ、そこにどのような補完が必要かという観点から問題状況の確認を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　現代は画像表象の社会的流通が量的にも質的にも他の時代を圧倒して増大したことを重要な特色の一つとしている。本研究は、そのことの意味を掘り下げるための拠り所として、画像表象の本質特性の解明を目指すものであり、画像表象と関わる諸学問分野が準拠すべき基礎研究の位置を占める。

研究成果の概要（英文）：This study addressed the basic question of what a pictorial image is. It relies on considerations on the theories of depiction in Anglo-American analytic philosophy. In particular, the starting point for my study is R.Wollheim’s thesis of "two-foldness" which he attributed to the experience of seeing pictures in general.
"Two-foldness" refers to the fact that the experience of seeing a picture is not only the experience of seeing the plane surface, but also the experience of seeing (the image of) an object which is not there. It can be said that the theory of depiction in contemporary Anglo-American aesthetics consists of various proposals about the exact nature of this "two-foldness". Among them, I basically agree to K.L.Walton's make-believe theory. But I also admit that make-believe theory is not the whole story about the nature of pictures. The large part of the present study consists of the considerations concerning what kind of complement is needed for make-believe theory.

研究分野：人文学

キーワード：画像　表象　絵　分析美学　哲学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

美術史家・芸術理論家の Ｅ・Ｈ・ゴンブリッチは、視覚イメージを論じた論文の冒頭で、「現代は視覚の時代だ」と述べ、各種の画像が大量かつ安価に流通する点に現代の文化環境の重要な特色を求めている。こうした時代認識は広く共有されてきたが、そこで問題とされている画像（picture）とはいかなる存在なのかについて、哲学的な基礎理論のレベルにまで掘り下げた研究は決して多くはない。本研究は、それを具体化するための枠組みとして、英語圏の分析美学における先行研究（それらは「画像表象」あるいは「描写」の理論として括られる）に注目しつつ、画像とは何かに関する理論的見通しの明確化を図ったものである。

２．研究の目的

美術史家のゴンブリッチが画像一般の本性を論じた理論的な著書『芸術の幻影』(*Art and Illusion*, 1960)を発表して以後、英語圏の美学においては、何人かの有力な論者により、絵が何かの絵であるとはいかなることかという基礎的な問をめぐる理論的検討が行われ、以後、描写の理論と呼ばれる問題圏が成立した。その初期段階を代表するのは、一方では、画像を慣習的な記号として捉えようとするＮ・グッドマンの記号論的アプローチ(*Languages of Art* (1968)他)であり、他方では、画像の働きが独特の知覚経験に裏付けられていることを力説するＲ・ウォルハイムの立論だった(*Art and Its Objects* (1968)他)。その後、サブパーソナルなレベルでの認知過程の重要性を説いたＦ・シアー（*Deeper Into Pictures* (1986)）や、鑑賞者による想像の働きを重視するＫ・Ｌ・ウォルトン（*Mimesis as Make-believe*(1990)他）等によって論争状況は厚みを増し、さらに、初期の議論では批判の対象となることが多かった類似説（絵とは実物のに姿であるとする見解）についてもより冷静な見直しの動きがみられる。加えて近年では、「知覚の哲学」全般の隆盛とも連携して多くの後続世代が参入し、論争はより多面的な展開を見せている（D.Lopes, *Understanding Pictures* (1996); R.Hopkins, *Picture, Image and Experience* (1998); John V. Kulvicki, *On Images* (2006); John Hyman, *The Objective Eye* (2006); Jason Gaiger, *Aesthetics and Painting* (2008); C.Abell & K.Bantinaki (ed.), *Philosophical Perspective on Depiction* (2010)など）。

こうした研究の進展に伴い、描写の問題圏は広がりと厚みを増してきた。しかし、こうした進展に伴い、その中で明確化してきたいくつかの異質な視点の相互関係や、それぞれが描写の問題にどのように貢献するのかについて、全体的な見通しを再確認する必要性が、今後の課題としてますます明確化してきたように思われる。こうした状況を受け、本研究は、描写をめぐる研究の総括を行い、画像とは何かを問う意義の再確認を行おうとするものである。

３．研究の方法

上記の研究動向について、私は平成 16-18 年度、および平成 22-24 年度の科研費・基盤研究（Ｃ）を通じてフォローを続け、そのさい特に、画像の知覚に伴う虚構的意識の構造に関心を寄せてきた。拙著『フィクションの哲学』（2009 年、改訂版 2017 年）はそうした検討作業に端を発する業績である。検討に際して私が準拠したのは、Ｋ・Ｌ・ウォルトンに由来するメイクビリーブ説の考え方である。それは虚構性の基盤を、作品から受容者の側に一定の想像を指定されるという事実に求めるものである。それは文学的虚構のみならず各種の画像表象を考える際にも重要な視点だ、というのが私の基本的立場である。

しかし、受け手の側に一定のメイクビリーブが指定されるという事態を理解するためには、知覚的な認知過程や社会慣習など、他の多くの要因にも留意する必要がある。そこで、本研究では、メイクビリーブ説を基本としつつも、他の諸説がどのような形で画像表象の理解に貢献するかという点にも配慮する必要がある。

こうした事情を踏まえ、本研究では、ゴンブリッチ以後の描写理論の総括を図るのにあたり、（１）受け手の側に指定される想像に立脚するメイクビリーブ説を基本軸としつつ、（２）それを他の諸理論と共存可能とみなす融和的な視点を堅持し、むしろ（３）多様な理論がそれぞれ異なる形で描写の理論に貢献する次第に注目する、という 3 点を方法論上の基本前提とした。

４．研究成果

（１）　本研究では、画像表象の本性を明らかにするための最初の着眼点として、ウォルハイムが指摘した、絵を見る経験が呈する独特な二重性に注目した。それは一方では多様な線描や菜食を施された物体の平らな表面に目を向ける行為でありながら、同時に、ある奥行きのもとに様々な事物の姿を見る経験でもある。こうした二重性を持った知覚経験は、普通の意味での画像表象に固有のものではない。壁の模様が様々な事物の姿に見えたり、空の雲が羊の姿に見えたりするときに起こっているのもこれと同じ二重性である。しかし、画像表象の場合には、そうしたいわば自然的な二重性に加えて、一定の仕方での二重性が作者によって意図され指定されているという認識に支えられている。そこから、描写を二重的な知覚と意図という二つの要因を軸に分析するウォルハイムの見解が成立する。

このように二重性を持った知覚経験に注目すること自体は、ウォルハイム以後、英語圏の美学では標準的な手順と見てよい。しかし、見方が分かれるのは、この二重性の本性をどう理解するかである。この点に関するウォルハイム自身の説明は控えめなものであり、多くの論者からは不十分なものとして不満が寄せられてきた。また、二重性という事実の意味（とりわけ、平面を見つつそこに奥行きを持った事物の姿を見るというときの、この後者の「見る」の意味をどう考えるか）についても、ウォルハイムの説明は物足りないと考える向きが少なくない。本研究では、こうした欠を補うための有力候補としてメイクビリーブ説に注目した。それは、平たく言えば、ウォルハイム中の二重的な知覚経験の実質を、平面の知覚に、奥行きを持った事物の姿を見ているかのような想像が重ね合わせること、として捉えるものである。メイクビリーブ説においては、絵が一定の内容を描写しているということが、絵を見る側にその一定の内容を見ているかのような想像が指定されていること、として捉えられる。

拙著『フィクションの哲学』以来、私はこうしたメイクビリーブ説の考え方には基本的に賛同してきた。しかし、画像表象を考える場合、この説にはある物足りなさを感じないではいられない。描写の本質が一定の内容を見ているかのような想像の指定にあることは間違いないが、しかし、そうした想像の指定を可能にしているのはどのような要因なのかという点について、メイクビリーブ説自体の内部には啓発的な答えがないように思われる。今回の研究の中でますます明らかになってきたと思われるのは、メイクビリーブ説だけでは取り逃がされてしまうような描写の背景要因の重要性である。これについて、現時点では全体的な見通しを整理した成果までは取りまとめできていない。が、当面の見通しとして、一方ではかつてグッドマンが力説していたような、描写を取り巻く社会慣習の役割に関する考察、またもう一方では、近年における認知説の論者（シアー、ロペスら）や類似説の復権を図る人々（ピーコック、ホプキンス、ハイマン、バッド等）の議論が、それぞれに重要な手がかりを提供しているように思われる。これらの点については、本研究の後継企画に当たる科研費研究において引き続き取り組んでゆく予定である。

（２）　今回の研究では、画像表象の定義を巡る以上の考察に加えて、画像表象の「内容」の概念についても一定の成果が得られた。

検討のきっかけとなったのは、「分離」をめぐる R・ホプキンスの考察である。「分離」とは、私たちが絵に目を向けたときに見えてくる視覚的内容が、絵の描写内容から「分離」するという事情をさす。単純な例で言えば、人物をモデルにした木炭デッサンを見る人は、そこに一定の姿態の人物がモノトーンで描き出されていることを理解するが、その際、人物が一定の姿勢や表情をしていることは絵の描写内容に属するが、その人物やその周囲の事物がモノトーンであることは、そうではない。それは絵のもとに見える内容には属しているが、しかし、絵の描写内容には属していない。

ホプキンスは、こうした分離現象を画像表象の一部の事例に見いだされる局所的現象として捉えているように思われる。しかし、拙論「絵の中に見えるもの」（2015）において指摘したように、これは画像表象全般に見いだされる一般的な現象として捉えるほうが正鵠を射ているように思われる。拙著『フィクションの哲学［改訂版］』（2017）では、絵の許に見える内容と描写内容の落差を、フレーゲの意味論における Sinn と Bedeutung の区別になぞらえた。それが適切であったかどうかは別として、画像表象の本性についてより正確な理解を得るうえで、絵の見え方と描写内容の関係についてより踏み込んだ検討が必要であることは間違いない。当面の見通しでは、この点の検討は、ウォルハイムが指摘した二重性を持った知覚経験と、それが描写内容に対して持つ関係の意味についての再検討という形で行うのが、これまでの理論的展開に即せば最も適切である。それもまた、本研究の後継に当たる科研費研究の重要課題の一つである。

（３）　描写の問題は、物体の平らな表面が私たちの知覚経験との関係において帯びる記号特性の問題であることに加えて、作者・提示者と鑑賞者・受け手の間でのコミュニケーションの問題としての側面も持っている。そして、その側面についての論議においてはしばしば、語用論の分野で展開された先行研究が援用されてきた。そうした先行研究の中で最も有力視されてきたものの一つが、ポール・グライスの「話し手意味」の理論である。

私はグライスの論文集を翻訳して以来、その意味の理論については折に触れて検討を重ねてきたが、今回の研究との関連では、グライスが「非自然的」意味として分類する話し手の意味が、「自然的」な意味にどのような形で動機づけられ、裏付けられているかという点に焦点を絞って批判的な検討を行った。

問題が表面化するのは、自分の感覚的・感情的な状態を話し手の意味として人に告げるような発話においてである。話し手意味に関するグライスの分析からすれば、「私は悲しい」という発言が当人が悲しんでいるという内容を意味すると言えるのは、話し手が、この文の発話に際して、自分が悲しんでいるということを相手に知らせようと意図し、しかも、その意図が相手に伝わることを意図し、さらには、それが伝わることで相手が実際に話し手が悲しがっていると信じることを意図しているのでなければならない。グライスは、こんな風に重層的な伝達意図に支えられた意味を、伝達意図が関与しない自然的な意味と対比している。自然的な意味というのは、今の事例と並行的な例で言えば、人の悲しげな表情その他の身体的な特徴を見て、そこから相手の悲しい感情を察するような際に働いている意味作用である。この場合には、例えば悲しげな顔や元気のない声音や一定の動作が、ちょうど煙が日の存在を告げ知らせるように、人の内面の状態を

告げ知らせる。グライスの理解では、この種の自然的な意味に対して、先ほどの話し手意味は非自然的な意味に属する。

しかし、今回の研究において私が注目したのは、むしろ、この両者の間に存在する連続面である。そうした連続面を際立たせるには、むしろ両者が断絶しているような場合を空想してみるのがよい。例えば、かつてパトナムは、行動主義を批判する中で、「超スパルタ人」なる空想を援用した。超スパルタ人は、普通の人間のような多様な内面生活を送って折り、例えば痛みの感覚を味わっているのだが、それを味わっているような身体的な素振り（うめいたり、顔を歪めたり、等々）は一切示さない人々、として紹介されている。パトナムによれば、このような人々は存在しうる。そして、そのことは、行動主義が偽であることの証となる、というのである。この場合、心的な現象は存在していながら、（行動主義によれば）その実質をなすはずの振る舞いが、存在していないからである。しかし、私見では、この議論の前提は誤っている。超スパルタ人は存在し得ないか、少なくとも、その事例における心的概念は私たちが普通に運用している概念とは異なっている。余裕を持った表情でにこやかに談笑し、痛みの素振りなど露ほども示さない人が、実は激烈な腹痛に苛まれている、などという想定は、通常の「激痛」の概念に準拠する限り、ありえない。心的な概念を行動概念に還元する古典的なタイプの行動主義には容易に賛同し難いが、しかし、心的な概念が行動概念に依存する、あるいは部分的にそれを内包しているとするより緩やかな形での行動主義には、否定し難い力があると思われる。

心と行動の間のこうした連続性を認める視点からすると、グライス流の話し手の意味と、自然的意味の間にも、一定の制約関係を認めなければならない。例えば、「私は悲しい」という発言が額面通りの話し手意味を持つためには、同じ内容を自然的に意味するような身体的な素振りが見いだされるのでなければならない。後者の自然的意味は前者の非自然的意味の一部というわけではないが、後者が成り立つための不可欠の制約である。

このように非自然的な意味が自然的意味に制約されるという事情は、画像を用いたコミュニケーション行為においても見いだされる。そこにおいても、一定の意味内容（描写内容）が伝達されるためには、絵に目を向ける当事者たちの間で、その絵が一定の認知過程を自然的に惹起するという事実が共有されていなければならない。私見では、描写の理論における類似説や認知説の論者たちがそれぞれなりの形で主張してきたのは、描写におけるこうした自然的な意味過程の重要性である。それを類似性の認知として捉えるか、意識下での認知過程の生起として捉えるか、細部についてはなお整理が必要であるように見受けられる。しかし、それがウォルハイムやウォルトンらが注目していたのとは別の要因に注目するものであること、そしてまた、それが相補的な役割を演ずるべきことは、明らかだと思われる。とはいえ、その全体像を正確に描き出す仕事はまだ今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 清塚邦彦	４．巻 16
２．論文標題 グライスの意味理論における「自然的意味」の位置づけについて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 山形大学人文社会科学部研究年報	６．最初と最後の頁 1,29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清塚邦彦	４．巻 18
２．論文標題 Ｅ・Ｈ・ゴンブリッチの画像表象論：『芸術と幻影』を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山形大学人文社会科学部研究年報	６．最初と最後の頁 39,74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清塚邦彦	４．巻 3466
２．論文標題 書評：三木那由他『話し手意味の心理性と公共性』（勁草書房）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 図書新聞	６．最初と最後の頁 3,3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 吉岡洋編（清塚邦彦　項目執筆）	４．発行年 2020年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 2
３．書名 美学の事典（「フィクション」の項目担当）	

１．著者名 清塚邦彦	４．発行年 2017年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 312
３．書名 フィクションの哲学〔改訂版〕	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関